

館ヶ丘プロジェクト



活動地域：館ヶ丘団地（八王子市）
社会課題：団地住民の社会的孤立
多世代交流の一過性の解消

活動の目的

高齢化している団地住民の生活支援や社会的孤立、学生と団地住民の多世代交流の一過性の解消を目的としている。そして、学生が団地に入り込むことにより、学生の持つ若さ・元気で起きる団地住民との化学反応で地域活性化に寄与していくことや団地で行われる春祭りや秋祭りに参加することで、関係人口の増加につなげていく。また、学生が個人活動や定期的に行う学生カフェなどのイベントを通して、継続的に団地に入り込むことによりコミュニティの偏在の解消、新たなコミュニティを形成していく。

活動により見込める効果

館ヶ丘団地は高低差のある団地のため、移動困難な高齢者が多く、また、単身世帯の高齢者が多いため社会的に孤立している方が多く存在している。そのため、団地タクシーやスマホ相談などの活動によって団地住民の生活の向上、そして学生カフェの開催や団地のお祭りに参加し、新たなコミュニティの形成や団地内外の人を呼び込むことで関係人口の増加につなげることが見込まれる。

学生が継続的に団地に訪れることで、団地に若い人がいないといったイメージを払拭し、活動的という印象を与えることができる。また、高齢者の若者に対する印象の変化や団地住民との関係性が深まることで、住民の生活水準をよりよくしていくことが期待できる。

今年度の活動

- 3月 学生カフェ、個人活動
- 4月 学生カフェ、個人活動
- 5月 春祭り、個人活動
- 6月 学生カフェ、映画交流会、個人活動
- 7月 学生カフェ、個人活動
- 8月 学生カフェ、個人活動
- 9月 防災フェスティバル主催、個人活動
- 10月 学生カフェ、個人活動
- 11月 秋祭り、個人活動
- 12月 学生カフェ、個人活動
- 1月 個人活動
- 2月 学生カフェ、餅つき大会、個人活動

活動で得られた成果

今年度は、多世代交流の一過性と関係人口の増加を課題として活動してきた。学生カフェなどのイベントや個人活動を継続的に行うことで、多世代交流の一過性を解消することができた。

また、秋祭りでは、日ごろの個人活動や学生カフェなどのイベント、広報活動により、去年の参加人数を100人上回った。団地内外からの来場者が増えることで、関係人口の増加や団地の活性化につなげることができた。

今年度から団地の商店街の活気を取り戻すことや若者のコミュニティづくりを目的として新たな活動に挑戦しており、URや自治会など対話の機会を持ち協力していただいている。

今後の課題点

館ヶ丘プロジェクトでは、団地内のコミュニティの偏在、社会的孤立の解消のため、継続性を持って活動してきた。しかし、それが学生の負担となり、個人活動やイベントに取り組むメンバーが一部になっていることが課題として挙げられる。

今後は、ボランティアに対する堅いイメージを払拭し、団地住民の方に楽しんでいただくだけではなく、自分たちも楽しめる場所を作っていくことで課題解決につなげていきたい。



活動地域：UR都市機構グリーンヒル寺田団地

社会課題：つながりの希薄化と地域衰退

活動の目的

2014年から寺田地域への参画開始を皮切りに、2016年3月、八王子市－UR都市機構－法政大学の三者で「グリーンヒル寺田団地における連携・協力に関する協定」を結び、当年11月にはついにグリーンヒルおひさま広場がオープンした。それからおよそ10年かけて作り上げ、コロナ化を経てもなお存続してきたこのコミュニティスペースを発展させ、この先も継続してより一層幅広い「**つながり**」の強化を図ると同時に、残り1つとなった空きテナントを新たなコミュニティスペースとして発足させる動きの高まりを助けることで、**寺田地域の活性化を加速**させたい。

加えてネット社会やコロナ禍の影響により希薄化する**人々の直接的な交流**がより活発になる環境を作り出すことを狙う。

活動により見込める効果

個性の光るコミュニティが自由に活動している地域の特性に対し、金銭的な利害関係をもたない**学生という属性を活かして**、各コミュニティとの連携ハードルを下げることで本来の意味の「**つながり**」を生み出せるのではないかと考える。また、@団地がそのコミュニティ同士を渡す懸け橋の役割を果たし、それぞれの個性を尊重しつつ、ゆるやかでありながら広がりがある、かつ安定した**寺田地域のつながり(一体感)**を生み出したい。

加えて学生自身も多世代との交流を通して普段触れられない価値観や体験から大きな経験と学びを得て成長することができるだろう。

当団体の活動を地域住民の方々と学生の両者に認識してもらい、今後も学生が寺田地域に持続的な関わりを保つための効果を期待する。



今年度の活動

【定期開催】

・お楽しみDAY

子どもたちに普段できないような体験を。ランタン作りや化学実験、利きチョコなどを企画

・スマホお悩み相談会

スマホに関する基礎的な悩みに1対1で丁寧に柔軟に対応、たわいのないお話も。

【その他の活動】

・Step Outてらだ だんちdeチェアリング

イベントに学生ボランティアとして参加

10月に1つの企画団体として参加

・梶田子ども食堂

配膳補助や子どもたちとの交流

・寺田活性化の会 イベント補助等

こいのぼり・七夕・イルミネーション装飾等

・グリーンヒル寺田自治会 イベント運営補助

クリスマス会内容企画、進行

・寺田学童保育所 イベント補助等

多摩祭、ボウリング大会、学童祭りなど

・グリーンヒル寺田幼稚園 交流イベント

11月に学食、円芝で交流

活動で得られた成果

@団地の活動において、活動の充実や新たな取り組みを通じて地域との**つながり**を生み出すのみならず、団体の認知度向上や地域住民の活動意欲の向上にも貢献できたと考える。例として「Step Outてらだ だんちdeチェアリング」というUR都市機構・URリンケージ主催の比較的規模の大きいイベントでは学生ボランティアとしての参加に加えて10月には世代を超えた交流を促す企画の運営を行い**多世代交流の懸け橋**として、その一助となることができた。普段の活動で個別につながりがあるスーパー「J-Smile」や「おひさまcafé」、そして地域の方々との**おひさま広場全体としてのつながり**形成を実感できる機会であった。

また持続可能な仕組みづくりにも注力し、参加学生の安定化を図ることで運営の負担を分散しながら**継続的な活動**を可能にした。今後も地域と連携しより多くの人に関われる場を築いていきたい。

今後の課題点

告知について、現在は全体の活動情報をXで流しながらチラシ配布での告知を行う形をとっているがチラシ配布への参加学生が固定化してしまった。レターパックやインスタグラムの活用などを現在模索中である。

またお楽しみDAYにおいて子どもの参加人数のばらつきが課題として挙げられる。多くの子ども達に企画を楽しんでもらうため、告知範囲の拡大や年齢関係なく交流できる場の提供を目指したい。

活動地域：相模原市

社会課題：運動習慣の低下

活動の目的

- ・法政大学体育会サッカー部と地域社会（団地や小学校）のスポーツを通じた関わりを持つ。
- ・弊部の認知向上とともに、地域の方の運動習慣の形成と新たなコミュニティ創出に寄与

活動により見込める効果

- ・法政大学体育会サッカー部の認知拡大
- ・地域の方の運動習慣の形成
- ・新たなコミュニティ創出

今年度の活動

10/26

グリーンヒル寺田にて
サッカー教室の開催

2/28

相模原市立広田小学校にて
サッカー教室の開催

活動で得られた成果

- ・法政大学体育会サッカー部の認知拡大
- ・近隣団地との関係性構築
- ・地元企業との関係性構築
- ・法政大学体育会サッカー部の選手による地域貢献



今後の課題点

イベントの数が少なく地域団体との継続的關係が作れなかった

来年度からは行政とも連携し、イベント数を増やす予定

活動地域：多摩キャンパス周辺地域、
代々木ポニー公園

社会課題：子どもたちへの馬と触れ合う機会の提供
人馬双方のウェルビーイングの向上

活動の目的

法政馬広場は、地域の子どもたちと馬とのふれあい企画を実施し、子どもに新鮮な学びを提供したり、豊かな情緒の形成を支援したりすることを目的に発足した。併せて、活動を通じて人と馬がどちらもウェルビーイングを向上させられることをプロジェクトの理念としている。

当プロジェクトでは、「言葉のいらないふれあい」をキャッチコピーに、来年度から地域の子どもたちを対象とした定期的な馬とのふれあい企画を開催することを目指している。この企画では子どもたちに新鮮な体験を与えるだけでなく、経験を培い人間関係を豊かにするなど子どもたちの精神的な成長に関与することを目指している。

活動により見込める効果

法政馬広場での活動では、子どもたち、地域社会、馬を取り巻く環境にポジティブな影響を与えることができると考えられる。

まず、子どもたちは普段経験することの少ない馬との触れ合いを通じて新たな興味・関心を育むことができる。また、地域の小学校や学童の子どもたちを大学に招いてイベントなどを行うことで、大学と地域社会とのつながりを高めることが期待できる。そして、既存の乗馬クラブなどの枠組みにとらわれない活動を展開することで、馬が活躍する場がさらに広がることを見込まれる。

当プロジェクトは同じく地域交流活動に取り組んできた**体育会馬術部**とも連携することで、より豊かな体験活動を提供できるよう取り組んでいる。また、今年度発足した「**人馬のウェルビーイング研究所**」との連携を深め、活動やその評価に学術的な視点を取り入れていくことを目指している。



今年度の活動

【**組織作り**】新年度にプロジェクトを立ち上げ、SICでの新歓などを通じてメンバー集めやチームでの関係性作りを行う。

【**全体研修**】8月末に渋谷区にある代々木ポニー公園とJRAの馬事公苑を見学し、ホースセラピーに取り組む事例などを学習した。

【**マレーシアでの研修**】8月末、メンバー3人がマレーシアで行われている障害者乗馬の活動を見学、体験させていただく。

【**多摩祭への参加**】10月に行われた多摩祭にて、馬術部と共同でポニーのふれあい企画に参加した。当プロジェクトとして初めてのイベントとなり、馬を使った企画に必要な環境や技術を学ぶことができた。

【**ポニー公園での研修**】12月から、メンバーが2、3人ごとにポニー公園で研修を行っている。一人ひとりが企画で求められる実践的な技術を学び、当日の馬や子どもとの関わり方を具体的にイメージすることができている。研修終了後には日誌を記入することで学んだ内容を共有しており、今後の新入生への研修にも活用したいと考えている。

【**SICの他プロジェクトと共同で地域の子どもたちとの企画を実施予定**】3月26日に若葉台プロジェクトと連携し相原市広陵小学校の学童クラブと、3月27日にゆうやけプロジェクトと連携し町田市ゆくのき学園の学童とそれぞれ馬とのふれあい企画を予定している。企画へ向けた準備を進めており、12月にゆくのき学園の学童を訪問し企画内容を話し合った際は、子どもたちを対象にした活動を安全に実施するために、学校関係者からの視点を企画に反映させることができた。

活動で得られた成果

今年度はプロジェクトの立ち上げや連携先との関係作りを行い、活動の基盤を整えることができた。特に、馬術部や「人馬のウェルビーイング研究所」など大学内の他団体とも連携を行うことで、より有機的、持続的な活動を展開できるのではないかと考えている。

10月の多摩祭でのイベントをはじめ一年を通じて行われた研修や関連した活動への参加などから、具体的な知識や技術だけでなく、当プロジェクトのモデルとなる活動を多く学び、今後企画を実現していくにあたって求められる役割や心構えについて理解を深めることができた。

今後の課題点

プロジェクトの目標である子どもと馬との定期的なふれあい企画の開催に向けて、知識や技術の習得をさらに行う必要がある。

本格的な活動の際は馬の輸送費やメンバーの交通費などが高額になるおそれがあり、外部資金の獲得も視野に様々な選択肢を検討していきたい。また、体育会馬術部や「人馬のウェルビーイング研究所」との連携方法を明確にし、それぞれの強みを最大限活かした企画作りを行っていきたい。

わくわくほうせい！

活動地域：多摩地域

社会課題：理系離れ エネルギー問題

活動の目的

演示実験や地域の子ども自身に実験してもらう体験型実験を通して子どもたちに科学の面白さを理解してもらい、同時に大人には理系教育への関心や知識を得ることで理系離れの解消に取り組んでいます。また、理科を用いてエネルギーを生み出し実際にそれを利用することを地域の人々に体験してもらうことで理科に関わりながら活動することを目的としています。そして理科を地域の人々に体験させるだけでなく、社会問題にも携われる活動も行っています。事例として、高齢者の日々の生活に必要な移動を楽しみ、行動範囲を増やすために新たな移動手段として電動モビリティ制作（太陽光で走ることが目標）などを行っています。

活動により見込める効果

子どもたちに理科を用いた実験を行うことにより、印象に残る体験を与えることができ、それにより理系離れに歯止めがきかせることができると見込んでいます。幼い時期に印象に残った理科への面白さや不思議な体験が成長した時に理科を学ぶきっかけになると考えています。また、同時に子どもの保護者にも体験してもらうことで親が子どもの理系選択を応援しやすくなるようにと考えています。保護者にはエネルギー問題や生活に必要な移動手段などの社会問題を用いたアプローチを行うこともできます。特に移動手段に関しては高齢者が気軽に乗ることができるようになれば、より科学の良さを幅広い層に広めることができ、様々な効果をより見込めると考えられます。



今年度の活動

6月には、福生市で行われた環境フェスティバルにおいて、ステージ企画に参加し、家庭でも簡単に買える材料のみを用いて実験を行い、科学の面白さを披露する科学実験ショーを行いました。そして10月には、キャンパス近隣にある保育園の園児を大学の実験室に招待し、割れないシャボン玉など幼い子どもでも分かる身近で不可思議な現象を起こせる科学実験を披露しました。また、11月にはめじろ台団地にて、ソーラーパネルによる発電を電源としたホットプレートを使いホットケーキの作るイベントをしたり、リチウムイオン電池を用いたモビリティの展示を行い、将来的にソーラーパネルと併用することでエネルギー問題にも対応しながら地域の方々の移動手段になりえる可能性と、科学のもつ力を子どもから高齢者まで多くの地域の人々に伝えました。

活動で得られた成果

活動の成果として一番大きなものは、地域交流を通して様々な方が、科学の力や面白さを体験し、感じる事が出来る機会を設けたことだと考えます。科学と聞くとどこか堅苦しく、難しいことであるように感じる方も多いと聞きます。そのため、理系離れの解消のためには、科学の技術を楽しく、刺激的に体験をすることができる機会が重要であると考えます。また、地域の方々のみならず、私たち学生も、科学の面白さを再認識することができるとともに、安全な実験の方法や薬品の扱い方を学ぶことが出来ました。同時に、地域の施設や機関と連携し、一つのイベントを作り上げる経験を行うことが出来たことも、活動の成果であると考えます。

今後の課題点

今年度の課題点として、実験の手順や仕事の割り振りが上手くいかなかった部分があることです。今年度は、新型コロナウイルスの流行により中断されていた様々な企画が再開されたため、学生にとって不慣れな部分があったことが原因だと考えられます。今後は今年度の活動を見直し、より余裕のある計画を立てるとともに、実験のバリエーションを増やし、より様々なイベントを通じて、科学の面白さを伝えていきたいと考えます。

活動地域：八王子市、町田市

社会課題：地域社会のDX推進

活動の目的

情報化社会の進展により地域社会における情報化がますます重要な位置を占めている。デジタル技術を利用した機能やサービスを利用できない人々とできる人々との間に格差が生まれている。これは、デジタル技術の利活用能力の差による社会の分断を招く危険性を含む重大な社会問題であるため、早急に解決する必要がある。また、現代社会はVUCAと呼ばれる変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の高い状況に直面している。このような時代において、地域社会がデジタル化に適応し、個々の市民が技術を習得することは、社会全体の安定と発展に不可欠である。

そこで本活動では、市民がデジタル技術を獲得し、それぞれが抱えている課題を解決するための手段を与えることを目的とする。

活動により見込める効果

現代社会には様々なデジタルトランスフォーメーションの段階に適応した市民が存在する一方で、デジタル技術に慣れていない層が第一段階でつまづくことも多い。そのような現状を踏まえ、こうした第一段階でつまづいている人々を支援する取り組みの重要性を明らかにするとともに、情報格差を解消し、社会がデジタル技術をベースにして動きやすくなることで、社会全体のDX推進が見込まれる。

10月20日ワークショップ実施時



今年度の活動

ワークショップの実施

2024年10月20日、法政大学多摩祭の教室企画の一環として架空の飲食店のモバイルオーダーアプリをモデルにUIに関する問題点を発見、解決してもらうというワークショップを行った。

使用ツールとして**Marvel**と呼ばれる視覚的にアイデアを具現化できるデザインプロトタイピングツールを用いた。このツールを使用してプロジェクトメンバーが事前に問題点のあるUIデザインのアプリを事前に制作した。

ワークショップでは、まず体験者に**Marvel**のアプリ表示機能を利用してハンバーガーセットを注文する指示を与え、その流れの中で問題を発見させた。次に実際に**Marvel**上で編集させてその問題を解決させた。

アンケートの実施

ワークショップ終了にアンケートを実施。ワークショップの感想や、ワークショップを通じた意識の変化を調査した。

活動で得られた成果

アンケートの結果より、9割の方が「ちょうどいい」か「簡単」と回答したことが分かった。つまり、自分の力で課題を発見しデジタルで解決するという目的を達成することができたと考えられる。

また、ワークショップの難易度において、「簡単」と回答した方の約8割が「**Marvel**を用いて自作Webサイト等を制作してみたい」と答えた。しかし、「ちょうどよい」もしくは「難しい」と感じた方に限ると約5割に留まる。このことから、難しく感じてしまうと、再度触れようとする意欲が薄れてしまっていることが分かった。

今後の課題点

参加してもらった人達にはある程度の高評価を得られたが、まだまだ参加者が多いとは言えない。体験のしやすさを維持しつつ、いかに多くの人に参加したいと思ってくれるかを考えたい。また市民DXという日常では聞き馴染みのない言葉に親しみを持たせられる工夫をしたい。今後、ワークショップの内容をより理解しやすく改善し、いかに平易にみせるか、体験してもらうかが鍵といえる。

ゆうやけプロジェクト



活動地域：相原町、長房地域

今年度の活動

社会課題：放課後支援の場で大学生が小学生の遊び相手になり、子どもを中心に相原地域の人々に交流を増やしたり地域に賑わいをもたらすこと

活動の目的

子どもたちと大学生とで地域交流すること。子どもたちと大学生が交流すること。ユニバーサルな、子ども達の知らない世界に実際に触れてもらうような活動をして、子ども達の経験を多様なものにすること。様々な年代の人と子どもたちとの関わりを繋げること。子どもたちの将来に向けて、ゆくとも（子どもとの交流）やりびんぐを通していろいろな学ぶことで子供達に経験を積んでもらうこと。

活動によって見込める効果

共にご飯を作ったり、工作をすることで子ども達の自立心を促す。また、地域スタッフなど多様な年代の人と協力することを学んでもらう。また、大学生との交流で、人と関わる楽しさを知ってもらう。大学生は、子ども達との関わり方を学べる。教育系、子どもと関わる分野で働くにあたって、何が子どもにとってよいのか、学びにつながるのか実践を通して考えることができる。

りびんぐ

- ・6月30日 流しそうめん
- ・7月27日 スマホ講座
- ・9月28日 お茶の世界を楽しもう企画
- ・12月22日 スノードーム作り

しゅわしゅわパーティー

- ・5月12日
- ・8月11日
- ・11月17日
- ・2月9日

活動で得られた成果

イベントの中で大学生と子ども達が会話する機会が増えたことで、これまであまり話さなかった子どもの口数が増え、他の子どもと話している様子を見ることが増えた。

また、規則を守ろうとする光景もよく見られるようになった。普段のゆくともにおいてルールを設定し、お互いが喚起し合う光景を見ることが増えたと感じた。

今後の課題点

子ども達に、安全に楽しくボランティア活動をしてもらうにあたって、3つルールを考えるのだが、その内容を詰めること。地域の少子化で、イベントに参加する子どもが少なくなっている。大学生も活動に積極的なメンバーが少ない。りびんぐというイベントに対するニーズを考え直したい。



活動地域：町田、キャンパス、新宿

社会課題：貧困、食品ロス

活動の目的

食品ロス問題と生活困窮者支援を同時に解決できる仕組みづくり。

具体的にはコンビニや飲食店の販売期限切れの廃棄商品（消費期限が近い食品）を路上生活者などの生活困窮者に配布したいと考えている。

ボランティア活動の参加や情報収集によって、貧困という大きな社会問題についてメンバー各々が知識を得ることで、より深く自分の考えを持つようになるのではないかと考える。それを通して、自分たちにできる、また自分たちだからこそできる支援の方法を探っていきたい。

学生の貧困問題に目を向け、学生だからこそできる学生への手助けを提案したい。

活動により見込める効果

食品ロス問題へアプローチ

→運搬焼却時のCO2削減、埋め立て時のメタンガス削減、生産流通時のコスト削減

貧困問題へのアプローチ

→生活困窮者の生活支援、



今年度の活動

7月

メンバー集め、説明会の実施

8月

新宿スープの会に参加

スープの会では新宿でホームレスにスープを配りながら困りごとなどを聞いて回った。現在も参加継続。

9月

つくろい東京ファンドへお話を聞きに行った。

生活困窮者支援について学んだ。

10月

フードドライブの準備。アンケートの作成。

11月

キャンパス内でフードドライブ実施（Ethicalと合同）。こども食堂せかいさんに寄付。

12月

キャンパス内で開催されたクリスマスマーケットにてフードドライブ実施。

活動で得られた成果

フードドライブではアンケートを取り学生生活の傾向をつかむことができた。

ホームレスに対するイメージ改革。フードドライブでは目に見える形で成果が見れた。

スープの会への参加ではメンバー各々、路上生活者に対するイメージが変わった。また路上生活者から「大学生が来てくれると楽しい」、「忙しいのに来てくれてありがとうね」などの声をいただき、大学生である自分たちだからこそできる支援を見出すことができた。

今後の課題点

欠席が多い。

→一人ひとりがやりがいを持てる工夫。

スケジュールの共有ができていない。

→リマインドをしっかりとる。

係の分散ができていない。

プロジェクトとしては、外部とのつながりを持ち、新しい活動をしたい。

助成金を有効活用できなかった。



藤野やまなみプロジェクト



活動地域：相模原市緑区牧野

社会課題：森林や里山の荒廃

活動の目的

藤野やまなみプロジェクトは、やまなみ公園を拠点に、地域の憩いの場としてのコミュニティガーデンを創出し、豊かな自然を保全することを目的として活動している。
この活動は、私たち「たまぼら藤野やまなみプロジェクト」と、地元の「牧野元気創生会」が協力して実施しており、地元住民と学生が連携して公園の美化に取り組んでいる。
また、やまなみ公園の整備を通じて、地域の方々に愛されるコミュニティガーデンの創出を目指し定期的に活動を行っている。

活動により見込める効果

本プロジェクトの活動によって見込まれる効果は主に三つある。
一つ目は、自然環境の改善である。芝桜の植樹などの整備活動により、自然公園が美しく保たれる。また、定期的に活動を行うことで参加者の環境保全に対する意識を高め、持続可能な取組みにも繋がる。
二つ目は、地域コミュニティの活性化である。学生と地元住民が協力して活動をすることで、世代を超えた繋がりが生まれる。
また、住民自ら手入れをすることで、公園への愛着が増し、地域の結束力が強まることにもつながっていると考える。



今年度の活動

今年度は、自然環境の保全の他に、学内外への活動の発信を視野に以下の活動を行った。

4月～5月 芝桜の植樹、新歓
6月 公園の整備、講演会の準備
7月 講演会
8月 彼岸花の球根を植える
9月～10月 公園の整備
11月 枯木の伐採
12月～2月 広報誌（リーフレット）の作成

以上の活動を地元の創生会と協働し、やまなみ公園や峰山の登山道などの自然公園の整備活動を行った。これらの活動を通じて、地域住民との交流を深め、自然環境の保全と地域の魅力向上に努めている。また、この取り組みを発信するために本プロジェクト主催の講演会や、広報誌の作成などを行った。

活動で得られた成果

この活動により、以下の成果が得られている。
まず、公園の環境が整ったことが挙げられる。今年度活動を始めた当初は台風の影響により自然が荒らされた状態だったが、整備活動を行ったことにより環境が美化され、魅力が高まった。
また、地域コミュニティの活性化も挙げられる。地元の団体と学生が協力し、やまなみ公園の整備を行うことで、その交流が深まった。また、活動内容や講演についてまとめた広報誌を発行し、学内外への情報共有とコミュニティの結束強化に寄与している。
さらに、相模原市の「令和6年度地域活動・市民活動ボランティア認定制度」において、認定を受け、活動が地域社会から高く評価されている。
これらの成果を通じて、本プロジェクトは地域社会の活性化と自然環境の保全に大きく貢献している。

今後の課題点

本プロジェクトでは、地域活性化と自然環境の保全に取り組んでいるが、今後の課題として以下の点が挙げられる。
その一つとして、人口減少と高齢化の課題がある。藤野地区では人口減少と高齢化が進行しており、地域活動の担い手不足が進行している。また、情報の発信力も不足している。現在はSNSでの発信があまりできておらず、特に若年層へのアプローチが課題である。

佐野川プロジェクト



活動地域：神奈川県相模原市緑区佐野川地域
東京都町田市大戸地域

社会課題：過疎化・高齢化による
耕作放棄地の改善、景観保全

活動の目的

佐野川地域は、2009年に朝日新聞社によって、「**にほんの里 100選**」に選出されているほど、風光明媚な地域である。しかし、**過疎化・高齢化の影響**によって農業従事者の人口が減っており、耕作放棄地が拡大している。我々の目的は、佐野川地域の耕作放棄地を改善し、将来にわたり耕作放棄地を生まな
いための持続可能なシステムを構築することである。

活動により見込める効果

佐野川地域の課題として、高齢化・過疎化が原因とする**耕作放棄地の増加**が挙げられる。

耕作放棄地の改善にかかる費用を農作物の販売によって賄い**金銭的に自立したシステムを確立**させる。また、佐野川地域の魅力がより多様な属性を持った人たちに向けて効果的に伝わるようなイベントを企画・実行することで**関係人口を増やしていく**ことも目標である。



今年度の活動

3月	城山e-bike 販売 山崎団地 販売 百草団地 販売 茶畑整備	10月	茶畑整備 多摩祭 出店 西八王子ハロイベ 藤野ふるさと祭り
4月	大地の再生講座 茶畑整備	11月	茶畑整備 大戸整備 まちカフェ！
5月	茶畑整備 お茶収穫	12月	まちのスコーレ エシカルモーニング 大戸整備 実践知大賞
6月	大戸竹刈り 大戸整備		
8月	茶畑整備		
9月	茶畑整備 2 回 大戸整備 ゆうやけ合同イベ		

活動で得られた成果

- ・お茶120kg（235袋）収穫
- ・新たな活動地域の増加、知名度の向上
- ・他PJとのコラボ企画の増加
- ・大戸芋収穫量増加
- ・町田法友会からの資金的援助獲得
- ・実践知大賞

「持続可能な社会への貢献賞」 受賞

今後の課題点

佐野川の地域の方との交流活動が少ないことが課題。そこで地域の中で浮き立った活動にならないために地域の人を巻き込んだ活動を行うことが必要だと考える。佐野川茶という地域資源を通じて自然と地域の人が繋がれる場となることで、自然発生的なコミュニティを形成していきたい。

しろやまふれんず



活動地域：相模原市城山地域

**社会課題：多世代交流の機会減少
地域と若者の交流の減少**

〈活動の目的〉

【多世代交流の機会を創出し、地域と若者のつながりを深め、城山地域の魅力を発信する】

- ・ 小学校での授業援助
- ・ 地域イベントへの参加
- ・ 農園活動 など

これらを通じて世代を超えた交流の場を提供し、地域の結びつきを強化することを目指します

〈活動に見込める効果〉

1. 世代間交流の促進

小学校での活動

→ 子供たちと関わることで新たな価値観や観点を広げられる

2. 地域の活性化

地域イベントへの参加

→ 高齢者との関わりが増えることで新たなコミュニティをつくることができる

3. 若者の社会貢献意識の向上

→ 地域の課題に直接かかわることで社会問題への関心が高まる
また、活動を通じて色んな世代とのコミュニケーション能力が育まれる

〈今年度の活動〉

- 6月 梅もぎ
- 7月 津久井湖夏祭り 準備
- 8月 津久井湖夏祭り 本番
- 10月 e-bikeツアー(安全講習会)
湘南小学校訪問
カワラノギクお花見会
- 11月 つくい湖湖上祭
秋のオレンジコンサート
- 12月 モルック大会
サンタdeコンサート (小学校)
- 2月 e-bikeツアー
(試走会・最終確認)
- 3月 e-bikeツアー(本番)

〈活動で得られた成果〉

- ・ 地域のイベントに参加することで様々な年代の地域の方と交流することができた。
- ・ 多様な価値観に触れ、考え方の幅を広げることができた。
- ・ 城山地域の現状を見つめながら、地域の歴史と未来について自ら考える意識を持つことができた。
- ・ 城山地域の魅力を再認識することができた。

〈今後の課題点〉

- ・ どの活動に力を入れていくか明確にしていくこと
- ・ しroyamaふれんず内での交流を増やし、様々な活動での連携をとりやすくしていくこと
- ・ 地域イベントにおいて全体的な状況を一人一人が把握しやすいよう工夫すること



活動地域：相模原市緑区 若葉台住宅

今年度の活動

社会課題：少子高齢化 空き家問題

活動の目的

若葉台住宅は、郊外のベッドタウンとして形成された背景から、**第1世代の高齢化**と次世代への住宅継承の困難により**空き家化**の課題を持つ。また、地域のイベントでは**参加世代が固定化**し、世代間交流が活発ではない。

そこで、若葉台プロジェクトは大学生ならではのアイデアを活かし、これらの課題を解決して地域を活性化することを目的として活動している。具体的には、これまでの高齢者を対象としたサークルやイベントに加え、多世代が参加できるイベントを企画・運営することを目指している。学生が高齢者と子どもたちをつなぐ架け橋となり、世代間の交流を活発にすることが狙いである。

昨年5月に結成したプロジェクトであるため、今年度は地域の人との交流とプロジェクトの存在を周知してもらうことを目標に活動を行った。例えば、毎週「若葉台住宅を考える会」(若葉台住民からなる地域の課題を考える住民組織)が開催しているコミュニティカフェ「YYわかば」に参加し、お手伝いとしてカフェの運営を行いながら、地域の方々と積極的に交流を図った。

また、プロジェクトの活動を知ってもらうことを意識し、夏祭りやクリスマス会などの既存の地域イベントに参加した。クリスマス会では、子供たちに向けたイベントを企画・運営し多世代交流の機会を増やした。さらに、自主企画として実施した「若葉台ヒストリー」では、若葉台についての理解を深めることを目的に、地域の歴史や魅力に焦点を当てた活動を行った。

活動により見込める効果

① 多世代交流の促進

地域イベントへの参加が高齢者に偏っている現状を踏まえ、学生が若者と高齢者の橋渡し役となり、多世代の交流を活性化できる。

② 子どもたちが楽しめる場づくり

「若葉台ふるさと計画」を通じて、子どもたちに地域での楽しい思い出を増やし、地域への愛着を育む場を提供できる。

③ 新たな視点での地域課題へのアプローチ

学生ならではのアイデアを取り入れることや、行動力を生かし学童などの新たなセクターとの繋がりを創出することで、高齢化が進む地域に新しい視点から課題解決策を提案できる。

活動で得られた成果

5月に発足してからコミュニティカフェのYY若葉や夏祭りなどのイベントに参加し、積極的に地域の方と交流をおこなった。それにより、若葉台プロジェクトとして学生が若葉台で活動を行うことや顔を覚えてもらうことができた。その結果、1月に行った自主企画「若葉台ヒストリー」では、参加者が47名も集まり自治会館が満員となった。予想以上の反響となり、普段このような会に参加されないような方たちを巻き込むことができた。また、地域の方との交流の中で、学生に対する要望や活動のアイデアをいただくことや、若葉台住宅設計者である井上氏の講義から、若葉台住宅の特性や課題点を知ることができた。

来年度の活動につながる学びと気づきを得られたことや、住民の方とのネットワークを広げられたことは大きな成果であった。

今後の課題点

① プロジェクト内外の連携強化

地域の方と頻繁に連絡を取る機会が少なく、さらに連絡が個別になってしまったため、イベント開催時に認識のズレが生じた。またプロジェクト内でも、情報共有の仕組みが整っていなかったため、円滑な連携が取れなかった。

② イベントの宣伝方法

子どもや保護者からのプロジェクトの認知度が低く、子ども向けイベントを開催する際の集客が課題となることが想定される。今後はPTAや地域で子ども向け活動を行う方々となつながりを持ち、効果的な宣伝方法を検討したい。



活動地域：相模原市緑区

社会課題：若い世代向けの地域の魅力
発信の不足

活動の目的

相模原市緑区の区政策課より依頼を受けた区内のPR活動。

メンバーが現地へ行き、取材をして、それらをプロジェクトのSNSや市のホームページ、広報誌などの紙媒体を通じてPRしていく。

PRのターゲットは、若い世代や子育て世代をメインに絞り、紙媒体やホームページで幅広い世代にも知ってもらえるよう工夫していく。

また、緑区内で活動しているプロジェクトの周知も行っていきたい。

活動により見込める効果

メディアを通じた情報発信で、より多くの人に自分たちの活動や区の魅力を知ってもらう。

さらに学生目線のSNS投稿で、気軽に区のことを知ってもらう。

緑区内で活動するSICの他プロジェクトの活動取材し、広めることで他プロジェクトと連携する。

今年度の活動

- ・区政策課の方々との会議
- ・小松コスモス園 取材、投稿
- ・小原宿本陣祭 取材、動画投稿
- ・津久井湖湖上祭 取材、投稿
- ・ノイロ。(カフェ) 取材、投稿
- ・相模湖MORIMORI 取材、投稿
- ・e-bikeモニターツアー 取材

区政策課の方々や区民会議に参加されている地域の方とお話しさせていただいた。

区政策課の方の意向や地域の方のおすすめの場所に取材に行った。

取材では、写真撮影や動画撮影、インタビュー撮影を行った。

そして、各種SNSアカウントを作り、取材で得た素材をもとに投稿を作りSNSで発信していている。

活動で得られた成果

地元の方々や区政策課の方々、区長、市長との交流ができ、人脈を形成した。

区内のイベント情報の獲得
活動に参加するたびに、新たに他の活動を紹介してほしいという依頼を受け、区内の情報を得た。

SNS投稿やその内容を編集することで、情報発信に係る技術を向上させた。

今後の課題点

- ・取材から投稿までに時間がかかった
- ・フォロワーを増やす
- ・人手不足
- ・編集技術の向上



ホーセーイノベーションクラブ Team Fashion



活動地域：多摩、八王子（めじろ台）

社会課題：地域のつながりの希薄化

活動の目的

—私たちTeam Fashionは、「多摩キャンパスで自己表現する場を作りたい」、「ただ単位を取るだけの大学生活は嫌だ」、そんなモヤモヤを持ったメンバーが集まり、2022年に設立されたチームです。「ファッションを楽しみ、自己表現する場を」をキャッチコピーに法政大学多摩キャンパスや多摩地域に自由にファッションを楽しみ、自己表現をできる環境を作る活動しています。私たちは現在、一年生7人、二年生9人、三年生1人、四年生1人の計18人で活動しています。今までの活動を通じて生まれた縁が広がり、現在は多摩キャンパスだけにとどまらず、東京都八王子めじろ台地域でも行っています。

活動に見込める効果

「地域・年齢を超えてファッションで繋がる」ことができることが主な効果です。

古着交換会やワークショップでは、服やアクセサリーの交換・販売を通じて法政大学の学生と交流することができます。

七タイイベントやハロウィンイベントでは浴衣や仮装などイベントに合わせたファッションを通じてめじろ台の子供たちと交流することができます。

ファッションショーでは自分たちがアレンジした衣装を通じてランウェイを歩く地元の方と交流することができます。

このように一年を通じてファッションを通じて様々な人と繋がることのできる活動が私たちの活動に見込める効果です。



今年度の活動

2024年度は「地域・年齢を超えてファッションで繋がる」をテーマにした多くのイベントを開催しました。

4月の新入生歓迎イベントに始まり、春学期はテーマを決めて行う写真撮影会&写真集作成や古着交換会などファッションを多摩キャンパスの人々に身近に感じてもらえるようなイベントを開催しました。

夏頃は、多摩キャンパス主催の多摩夏及び多摩祭に出店しました。また、めじろ台の七タイイベント、都内で開催したDJイベントなど、多岐にわたる活動を行いました。

秋頃は引き続きめじろ台にてハロウィンイベントを開催しました。ピニャータやハロウィンにまつわるクイズなど小さな子供たちが楽しめる演目を実施しました。

冬には、活動の集大成であるファッションショーを開催しました。春の古着交換会で集まった古着にメンバーが刺繍などを加え、その衣装を着た学生や地域の方がモデルとしてランウェイを歩きました。

活動で得られた成果

古着交換会やワークショップでは、来客した学生との交流だけでなく、今年新しく入ったメンバーとの親睦を深めることもできました。

7月の七タイイベントや10月のハロウィンイベントでは約30人ほどのめじろ台の子供たちと交流することができました。

11月のファッションショーでは、めじろ台のコーヒーショップや法政大学の軽音サークルがイベントを盛り上げるために協力してくれました。協力の甲斐あって、地域・年齢を問わず、40人以上の観客を集めることができました。

以上の成果から本年度のイベントのテーマであった「地域・年齢を超えてファッションで繋がる」を実現できました。

今後の課題点

一年を通じてたくさんのイベントを企画・開催しているため、準備にかかる時間と人員が足りなくなってしまう、一部のメンバーに仕事が集中してしまうことが課題点です。どのイベントに注力すべきかしっかり優先順位をつけて事前に計画をしっかり立て、仕事を配分することで改善していきます。

ホーセーイノベーションクラブ Team Circulation



活動地域：多摩キャンパス

今年度の活動

多摩祭

廃油を使用したキャンドル制作体験会を実施。
予想を上回るお客さんが訪れた。
SDG sに興味がある方はもちろん、無関心だった方にも身近なもので環境問題を考えてもらった。

映画上映会

円芝にて「プラダを着た悪魔」を上映。
「あなたの一番大切なものは何ですか？」というサブタイトルの下、参加者に私生活における大切なものを見つめなおしてもらった。

イノスぺ

社会学部棟のPatioを改修し、学生のためのイノベーションスペース（イノスぺ）を作る計画が進んだ。レイアウトなどのハード面は大まかに決まり、運用方法や実施する企画などのソフト面も大筋は決まった。2025年12月オープン予定。

活動で得られた成果

学生が何に興味があり（ニーズ）、どんなアプローチを取れば良いか理解できた。

また、全イベントに共通して「知名度向上」が目的であり、まだまだ成長の余地はあるが、去年に比べ認知が広まった。

しかし、改善点が多く見受けられ、今後のイベントに活かしていく。

社会課題

夢や目標を持った学生が出会う機会が少ない
多摩キャンパスのブランディング

活動の目的

ここから始まる、自分イノベーション
No boundary, Do innovation!

夢や目標を持った学生が出会い、自発的な情報交換や意見交換が生まれる場所作りを行っている。

活動により見込める効果

自分を見つめ直す機会づくり

夢や目標を持った学生が主体性を持って、同志と情報交換や意見交換などをする場所や、そのような仲間と出会う機会の創出。「好き」や、「やりたい」の気持ちに向き合う時間を創りあげる。

同じ価値観はもちろん、違った意見の人との繋がることによって、新たな発見や価値観をクリエイト！

分野にとらわれず学生の興味を引く取り組みを行う。それによって学生が大学生活におけるイノベーションを起こし、それが互いに影響しあう循環が起ることを期待する。



今後の課題点

インプット・リサーチ・バックアップ

「日の下に新しきものなし」「センスは知識から始まる」を心に刻み、議論を重ねる。
加えて、学生の求めているものの解像度を上げ、イメージの乖離が起きないように修正しながら活動する。
そして、トラブルが起きないように予備案の予備案まで準備し、安心・快適にイベントに参加してもらう。

ホーセーイノベーションクラブ Team Ethical



活動地域：多摩キャンパス、周辺地域

社会課題：孤独感の顕著化

活動の目的 **／学生の栄養の偏り**

今年度の活動では、学生の交流機会を増加させることによって「コロナ禍を経た学生の孤食問題」の改善を図るとともに、上京などの生活環境の変化により自らで食を選ぶ機会が増えた「学生の栄養の偏り」について、自らの食生活を見直す機会を提供することで改善を目指してきた。

また、都市部のキャンパスとは異なる「多摩キャンパスならではの良さ」を発見・提供するために、積極的に町田市や相模原市の食材を使用することで、遠方から通う学生たちに多摩地域の食の魅力を紹介し、興味を持ってもらうことを目標としている。さらに、食を通じて学生と販売者や提供者の人々をつなげる機会を設けることで、「食」で地域と学生、多摩キャンパスを豊かにしていくことも目的としている。

活動により見込める効果

本活動を通じて、「学生の孤食や栄養の偏り」といった課題の改善が見込まれる。学食以外にもキャンパス内での「食」に関する交流機会を増加させ、栄養バランスの摂れた食事を提供する場を増やすことで、コロナ禍を経た学生の孤食問題の改善や、学生の健康的な食習慣の意識向上も図れるだろう。

さらに、多摩地域の食材を活用することで、新鮮な地元食材を味わえ、地域住民の方々との交流機会が豊かになるなど、都市部のキャンパスでは得られない「多摩キャンパスならではの良さ」を体験する機会を提供することができる。それにより大学周辺地域への関心の高まりや、学生と販売者・提供者とのつながりの深化も期待される。



今年度の活動

今年度は、例年多摩キャンパスで開催されている「多摩夏まつり」や「多摩祭」への参加だけでなく、Ethical独自のイベントも企画・開催してきた。

EthicalのInstagram公式アカウント上に投稿した「ベストワングルメ」では、多摩キャンパスに通う学生たちにインタビューを行い、学生の地元のおすすめのご飯屋さんや、留学生の母国料理や食文化についての紹介を行った。

また、NPO法人やまぼうし「スローワールド」さんの協力のもと、10/22～10/24の3日間でヨーロッパをコンセプトとしたランチを提供する「EAT LOCAL」や、「スポーツブランディング」の資金支援を得て「たまらば佐野川プロジェクト」との共同で12/10～12/13の4日間で100円で朝食を提供する「100円モーニング」の企画も開催した。

さらに、西八王子で行われる「西八王子ハロウィンイベント」への参加や、「いもきちや」と「JA町田アグリハウスさかい」さんの協力を得て多摩キャンパスで焼き芋と野菜を販売する「八百屋企画」など、地域の方々と協働したイベントも行った。

活動で得られた成果

「EAT LOCAL」や「100円モーニング」などの学内での食事企画では、栄養バランスの摂れた食事と、新たな交流機会を提供する場となった。また、NPO法人やまぼうし「スローワールド」さんの協力のもとエッグドームのカフェテリアで行ったこともあり、学内での知名度の向上も得られた。特に、「100円モーニング」では、各最寄り駅と多摩キャンパスを繋ぐバスの混雑緩和にもつながっていたとの声を頂いた。

さらに、「EAT LOCAL」や「ベストワングルメ」では、留学生の食文化に焦点を当てたこともあり、食の異文化交流を図り、学生たちの食への関心を高めることにもつながっただろう。

「西八王子ハロウィンイベント」への参加や「八百屋企画」では、地域交流の機会や地域での活動認知も得られた。

今後の課題点

今年度の活動では、学内イベントでの地域食材の活用不足が感じられたため、来年度以降、学内でのイベントに販売する食事に、より地域食材を活用していきたいと考える。

また、学内でのモーニングやランチ企画などでは、プロジェクトチーム内での会議のみで決定せず、SIC外の学生の意見の反映もできるとより望ましいだろう。

SIC 学生スタッフ



活動地域：法政大学多摩キャンパス

**社会課題：SIC自体の周知不足
SIC内外との連携不足
情報発信の分散**

活動の目的

主にソーシャル・イノベーションセンター(SIC)をフィールドとし、**学生自らが、学生目線のアプローチでSIC全体の運営を行う**ことを軸とし、活動している。上記の課題を解消するため、

- ①SICの魅力化・盛り上げ
- ②イベントの企画・運営
- ③プロジェクト間の連携の促進
- ④各活動への窓口

の大きく分けて4つの役割を担っている。

活動により見込める効果

SICの魅力化や盛り上げにより、学生、学校の教職員、地域の方々など、多種多様な人にSICを認知・利用してもらい、**広く意見交換ができる場**にする。それにより、SICの取り組みが、それぞれが対象とする社会で**よりたくさんの、またより質の高い活動ができるようにする**。また、既にSICに関わっている学生にもセンターを「拠点」として日常的に利用してもらい、**SICへの帰属意識を向上**させる。このようにして、**SICの取り組みの質を向上**させていきたい。

さらに、私たち学生スタッフが主催する企画を通して、個々で活動しがちな学生プロジェクトの**連携、相互理解**のきっかけを作る。

また、多くの取り組みが個々に動いているため分散してしまっていた情報発信の場を場を統一し、SICに興味をもった方々が、求める情報にアクセスしやすいような情報発信の効率化を目指している。このようにして学内外へ積極的に情報発信をすることで、**SICの存在感を強めていきたい**。

今年度の活動

- 4月 新歓祭
新入生ガイダンス
新歓WEEKS
コミュニティデザイン論にてSIC紹介
- 6月 代表ミーティング
現代福祉学部基礎演習にて出張授業
- 8月 オープンキャンパス
- 9月 多摩地域形成論にて出張授業
- 10月 中間報告会
- 12月 SICカフェ(パワポ講座)
多摩シンポジウム
- 3月 地域交流DAY

通年でXやInstagramの運用、Webサイトの作成を行ってきた。

活動で得られた成果

新入生ガイダンス、新歓祭、新歓WEEKSを通して、多くの学生プロジェクトで大幅なメンバー増加に成功した。また、秋チャレも含め、昨年よりも学生プロジェクトの数が5つ増え、**学内でSICの知名度が高まってきている**と考えられる。学部への出張授業やSIC紹介の機会も複数回いただき、**SIC全体の広報としての役割**を果たすことができた。

オープンキャンパスでは、昨年の反省を生かし積極的な呼び込みを行った結果、昨年よりも合計来室人数が24人増加した。本学に興味をもつ高校生に向けても、**SICの存在をアピール**できた。

また、昨年から作成していたSICのWebサイトを完成させることができた。今後は各種SNSに加えWebサイトの運用にも力を入れていきたい。

以上のように、1年を通して**学内外へのSICの周知に成功し**、SICのさらなる周知に向け**情報発信の場を統一する場を整える**ことができた。

今後の課題点

今年度の活動の課題点として、学生プロジェクト連携企画を当初の予定通りの頻度で開催できなかったことが挙げられる。今年度企画した中で連携企画の在り方、進行の仕方に反省点が挙げられたため、今後の**進め方を再考**していく。

また、Xの運用が活発だった一方でInstagramの更新が滞ってしまった。Instagram、X、Webサイトそれぞれ異なるアプローチで情報発信できるプラットフォームであるため、今後は**並行して活発に更新**していきたい。Webサイトについては、SIC外への情報発信の場としてだけでなく、**プロジェクト同士の連携のきっかけ**にもなることを目指す。学生プロジェクトが自ら更新することで、互いの活動に関する情報を目にする機会を増やし、さらなる**相互作用**を生むものにしたい。



SIC ボランティアスタッフ



活動地域：相原（町田市）

今年度の活動

社会課題：防災

活動の目的

今年度の活動目的は防災意識を広めることにある。災害に対する意識が薄れる昨今において、学生が防災の意義を説くことによって地域の方に今一度考えてもらおうという意図がある。また、ただ防災の知識を伝えるだけでなく、実際の状況において使える知識（実践）を伝えることを第一に考え伝えている

活動により見込める効果

- ・活動に見込める効果としてはより多くの人に防災を考える機会を与えることである
- ・大学周辺地域とのコミュニティの形成

（まちカフェ：防災マップ作り）



5月：学生天国

→ナマズの学校（防災カードゲーム）

9月：竹カフェ

→地域住民の方に向けてキャンパスツアー、防災食品の試食等

11月：まちカフェ

→クイズ、防災マップ作り

3月：竹カフェ

→ボッチャ

活動で得られた成果

- ・防災意識の浸透
→主にこどもと高齢者をターゲットに防災の意義を伝えることができた。
- ・大学周辺地域との関わりの拡大
→竹カフェからのつながりでこどもセンターぱおさんに声をかけてもらい、防災フェスティバルに参加、このほかにも相原地区の町内会にも顔を出す機会もあった。

今後の課題点

課題としては地域に根差した活動を増やすことである。様々なところで防災に関する活動をしているが、これからは地域と一体となった取り組みを行いたいと考えている。特に大学と周辺の地域の結びつきを強めるための役割を担いたいと考えている。